ヒンディー語の非定形型の副詞節

——日本語との対照——

西　岡　美　樹

要　旨

本稿は，ヒンディー語の非定形動詞による副詞節を，日本語の副詞節と対照し，共通点及び異質な点を探ったものである。ヒンディー語の非定形動詞には，不定詞（原形不定詞を含む），未完了分詞，完了分詞の３つがあるが，それらが日本語の連用形（中止法のもの），テ形や，両言語に共通な形式名詞を使用した副詞節等と，形式上及び機能もしくは意味の上でどのように対応するかが本稿で明らかになる。

目　次

１．はじめに…… 2
２．形式認定…… 2
３．不定詞型…… 5
(1)　原形不定詞…… 5
(2)　不定詞斜格形…… 7
(3)　不定詞斜格形＋後置詞…… 8
(4)　不定詞斜格形＋属格後置詞＋形式名詞＋（ゼロ）後置詞 ……10
４．分詞型……12
(1)　未完了分詞型……12
ａ）　ヒンディー語の未完了分詞 ……12
ｂ）　日本語の連用形……14
(2)　完了分詞型……15
ａ）　ヒンディー語の完了分詞 ……15
ｂ）　日本語のテ形……17
５．両言語の共通性と異質性……18
６．終わりに……21
引用文献……22
参考文献……22

キーワード：副詞節，非定形動詞，不定詞，完了分詞，未完了分詞，形式名詞

1．はじめに

日本語を母語とする者にとっては日本語と似通っていて習得が易しいといわれるヒンディー語だが，もちろんそれはある一面を捉えての，断片的な話である。単文における語順は基本的に同じでも，細かく見ていくと共通性ばかりではなくさまざまな異質性が見えてくる。

本稿は，対照研究の一環としてヒンディー語の不定詞と分詞に関わる非定形動詞による副詞節を取り上げ，形態・統語論の面から日本語と対照し，両言語の共通な点や異質な点を分析し，明らかにすることを主眼とする。その際，最低必要な限りの意味分析にも触れる。

ヒンディー語の副詞節には本稿で主に扱う非定形動詞による副詞節とは別に，定形動詞を使用する関係副詞節，条件節があるが，これらは時制（tense）や法（mood）に関わるため，本稿ではあまり触れないことにする。またもう一つ，そもそも単文には，名詞述語文，形容詞述語文，動詞述語文の3種類が存在するが，本稿では，名詞述語文と形容詞述語文を除き，動詞述語文に焦点を絞ることを予め断っておきたい。というのは，ヒンディー語では名詞述語，形容詞述語の場合，どちらもコピュラ動詞を使うが，日本語[1)]では名詞述語文の場合のみ，コピュラ動詞に相当する助動詞「だ」を使うが，形容詞述語文は助動詞を伴わない，いわばゼロ助動詞だからである。この助動詞「だ」の接続形「な」，及びゼロ助動詞で形容詞自体が動詞と同じように様々な接続形式に変化するものと，すべてコピュラ動詞を使うことで事足りるヒンディー語の名詞述語文及び形容詞述語文の対照までは，本稿では行わない。もう一点，日本語の文法としては学校文法等の国語学の枠組みを元にしていることも予め断っておく。

以下，第2章でヒンディー語と日本語の対照分析に当たって改めて形式認定を行い，第3章及び第4章で不定詞型と分詞型に大きく分け，それぞれ例を挙げながら観察していく。第5章では，第3章，第4章の具体例の観察に基づき，両言語の非定形副詞節に見られる共通性と異質性について考察する。

なお，本稿で扱う例の出典略号を以下に示しておく。

出　典　名	略　号
『基礎ヒンディー語』	KH
『ヒンディー語会話集』	HKS
Cācā Caudharī vol. 9	Ch-9
Hindī vyākaraṇ	HV
Teach Yourself Hindi	TY
Mahābhārat kī śreṣṭh kahāniyāṁ	MSK

2．形式認定

では，本論に入る前に，本稿で扱う形式について観察し対照の妥当性を明らかにする。

以下にヒンディー語及び日本語の動詞のパラダイムを挙げる。動詞の例としては，ヒンディー語は母音語幹の動詞 ‘ānā’「来る」，日本語は五段活用動詞の「話す」を使用している。またここで取り扱うのは動詞の非定形だが，動詞体系の全体像を摑めるよう，定形も含めて概観する。

ヒンディー語の動詞パラダイム［動詞 ‘ānā’「来る」］

定形							
直説法				条件法			命令法
未来時制		sg.	pl.		sg.	pl.	
	1	āūṁgā	āeṃge	1	āūṁ	āeṃ	
	2	āegā	āoge/āeṃge	2	āo	āo/āeṃ	
	3	āegā	āeṃge	3	āe	āeṃ	
現在時制		sg.	pl.		sg.	pl.	ā
	1	ātā hūṁ	āte haiṃ	1	ātā	āte	āo
	2	ātā hai	āte ho/āte haiṃ	2	ātā	āte	āie
	3	ātā hai	āte haiṃ	3	ātā	āte	āiegā
過去時制		sg.	pl.		sg.	pl.	
	1	āyā	āye	1	āyā hotā	āye hote	
	2	āyā	āye	2	āyā hotā	āye hote	
	3	āyā	āye	3	āyā hotā	āye hote	

（下段に続く）

非定形						
語幹	原形不定詞	不定詞			分詞	
ā	ā	名詞用法	ānā	未完了	名詞用法	ātā
		形容詞用法	ānā		形容詞用法	ātā
		副詞用法	āne		副詞用法	āte
				完了	名詞用法	āyā
					形容詞用法	āyā
					副詞用法	āye

日本語の動詞パラダイム［動詞「話す」］

終止形		
	直説法	命令法
未来時制	はなそう	はなせ
現在時制	はなす	
過去時制	はなした	

非終止形				
語幹		分詞1（継続）	分詞2（仮定）	分詞3（並列）
はなさ はなし はなす はなせ はなそ	未完了	はなし	はなせば	
	完了	はなして	はなしたら	はなしたり

まず本稿で扱う非定形に対立する定形から簡単に見てみよう。ヒンディー語の現在時制及び日本語の未来時制[2)]は，単純形ではなく複合形（未完了分詞＋コピュラ動詞現在形，いわゆる日本語の，語幹に拘束形式「—う／よう」の付いた意向形のような複合形）であるが，ここで提示しているのは文法項目を軸にしたパラダイムなので，形式上の単純形，複合形の区別をしていないことをここで断っておく。

ヒンディー語の定形については，インド・ヨーロッパ語族出自の言語らしく，人称，性，数の区別がある。しかし，ここでは男性形の人称，数の形だけを示すのみで，女性形は省略した。一方，ヒンディー語の定形に当たる日本語の終止形には，人称，性，数の区別はない。また，日本語には条件法が存在しない。それに相当するものは，後述の非終止形の分詞２となる。両言語とも命令法は定形として持っている。

次に非定形，非終止形についてだが，ヒンディー語の動詞の非定形には，語幹，原形不定詞，不定詞，未完了分詞，完了分詞の５種類が存在する。対する日本語には語幹と分詞しかないことが，このパラダイム表から分かる。

このうち両言語に見られる語幹は，他の接続形式に付かない限り単独で使用できない拘束形式のことを指す。ヒンディー語の語幹は一つの形のみで，これに命令形接辞，未完了分詞もしくは完了分詞の接辞などが付く。また，命令形にはゼロ接辞のもの[3)]があり，これが語幹と同形になる。

日本語の語幹は，たとえば五段活用「話す」ならば，「話さ／話し／話す／話せ[4)]／話そ」の５つの形があり，一段活用の「食べる」ならば，「食べ」のように１つの形しかない[5)]。これらには他の拘束形式「—ない，—ます，—ϕ，—る，—う，—せる」（五段活用用）もしくは「—ない，—ます，—る，—れる，—よう，—させる」（一段活用用）などがそれぞれ接続される。

次に挙げた原形不定詞はヒンディー語にあるが，日本語にないものである。ヒンディー語の原形不定詞の形は前述の語幹の形と見た目は変わらない。しかしながら，この語幹と一致した形は自由形式として用いられ[6)]，順次起こる事象を接続する機能を持つ。これについてはヒンディー語伝統文法やこれまでのヒンディー語学研究で確固とした文法範疇が設けられていなかったが，拘束形式の語幹と一線を隔した自由形式であるがゆえに，ここでは原形不定詞の一種と認定し処理する。原形不定詞と対を成す通常の不定詞（例えば英語の to 不定詞の類）も，日本語にはないが，ヒンディー語にはある。その用法としては，副詞用法の他に，名詞用法，形容詞用法もある。

最後の分詞だが，これを筆者はどちらの言語にも存在すると考え，以後の話を進める。ヒンディー語は，語幹に ‘-tā’ 接辞の付いた未完了分詞と ‘-(y)ā’ 接辞の付いた完了分詞である。これらにはそれぞれ名詞的な用法，名詞を修飾する形容詞的な用法もあるが，本稿は副詞節を扱っているのでこれらについては特に触れない。なお，この副詞的用法には，分詞の斜格形が用いられる。

日本語でヒンディー語の未完了分詞，完了分詞に当たるものは，分詞１の未完了，完了に挙げた，いわゆる中止法で用いられる連用形とテ形（パラダイムの例では「話し」vs.「話して」）である。前者は，現代では専ら文語体に使用され，口語体ではそれに代わりテ形が広く使用されているが，これらは本来，事象の未完了と完了の対立を起こしているものであった。テ形の出自は，終止形の過去時制，もっといえば，完了相（perfective aspect）を以って表すアオリスト過去時制ともいえる「た」形の非終止形である。それに対立した未完了分詞となるのが，この連用形である[7)]。

このように未完了 vs. 完了がアスペクトとして対立を成している分詞だが，日本語の方には３種類ある。まず，文を接続するために用いられる分詞１[8)]，ヒンディー語では法が司る条件を表す分詞２の「―ば／れば」及び「―たら」形，そしてヒンディー語にはない，事象の並列を表わす分詞３「―たり」形[9)]がある。この分詞２と分詞３については，前者はヒンディー語に等価値のものが同じ範疇になく，後者は存在しないので本稿では言及しない。また，本稿で主に扱う分詞１の形については，本稿では以後それぞれ，国語学の用語である連用形，日本語学のそれであるテ形で呼ぶ。

以上のパラダイム及び範疇の平行性を前提とし，次章よりヒンディー語と日本語のそれぞれの範疇にある具体的な例[10)]を観察していく。

3．不定詞型

パラダイムで提示した通り，この不定詞型はヒンディー語にしか存在しない。日本語にはないこの不定詞型には，語幹と同じ形である原形不定詞，もしくは通常の '-nā' 付き不定詞の斜格形があり，ともに副詞節を表す。また，その不定詞の斜格形に後置詞が付くもの，そして不定詞に形式名詞が付くものがある。ここではそれらを含む例を順に見ていく。なお，これらに形式上相当すると思われる日本語も，必要に応じて例示する。

(1) 原形不定詞

ヒンディー語の原形不定詞は，順次起こる事象の接続を表す。例えば，不定詞 'dekhnā' の原形不定詞は 'dekh' である。しかし，これは現代ヒンディー語ではほぼ見かけることはなく，見かけるとしても書き言葉に限られている。現代語では，通常，文の非定形接続には，語幹（ここでは 'dekh'）に接続分詞 '-kar' を付けるものが接続を表す形式として広く使用される[11)]。以下にそれらの例を挙げる。

(1)	bhīm	hiḍimbā	ko	apnī	or	dekhte	dekh	bolā ….
	ビーマ	ヒディンバー	を	自分の	方向	見る―未完了	見る―幹	話す―過去

「ビーマはヒディンバーが自分の方を見ているのを見，言った…。」[MSK : p. 75]

(2) us kisān ko apnī śaraṇ meṃ āyā dekh iṃdradev baṛe
その 農夫 を 自分の 庇護 に 来る—完了 見る—幹 インドラ神 大変

prasann hue.
喜んだ なる—過去

「その農夫が自分のところへ庇護を求めてきたのを見，インドラ神は大変喜ばれた。」

[KH : p. 201]

(3) tum roḍrolar lekar mere piche āo.
おまえ ロードローラー 取る—幹＋接続 私の 後ろに 来る—命令

「おまえはロードローラーを持って俺の後について来い。」[Ch-9 : p. 5]

(1)と(2)では 'dekhnā' 「見る」の原形不定詞 'dekh' が，日本語の分詞 1 である「見」のように使用されている。(3)は，'lenā' 「取る」の 'le' に接続分詞 '-kar' が付いたものだが，同じく順次起こる事象を接続するためのものである。この場合 'le' は '-kar' なしでは成立しないので，それ自体，表面的には原形不定詞 'le' と同じに見えても，こちらはあくまで拘束形式の語幹といえる。

このように原形不定詞と語幹は見た目には全く変わらない。日本語について少し触れると，このヒンディー語の原形不定詞に相当するものはないが，今のヒンディー語の例と同じく拘束形式の語幹を使う副詞節はある。それを以下に少し例示する。

(4) 明日一緒に御飯を食べに行こう。

(5) 私は，仕事をしながらテレビを見るのが好きだ。

(6) トラブルの残作業を片付けつつ，自分の仕事をこなす。

(4)は「食べる」の語幹の一つ「食べ」に格助詞「に」を付けたものである。(5)と(6)は国語学でいう接続助詞「ながら」，「つつ」を用いた例である。どちらも事象の同時性を意味する副詞節を形成する。

実際，(4)の「食べ」，(5)の「し」，(6)の「片付け」の 3 つは分詞 1 で使用されるものと見た目は変わらないが，あくまで分詞 1 は自由形式で，ここで挙げているものは語幹であり拘束形式である。

ところで，上の(3)で挙げた形式に，日本語の副助詞に相当するヒンディー語の小詞が付いている例を最後に見てみよう。

(7) rām us kā rāz jānkar bhī kisī ko kuch nahīṃ kahā.
ラーム 彼 の 秘密 知る—幹＋接続 小詞 誰か に 少し 否定 言う—過去

「ラームは彼の秘密を知っても，誰にも何も言わなかった。」

(8) buddhimān manuṣy samay ko dṛṣṭi meṃ rakh karke
賢い 人間 時 を 視野 に 置く—幹 する—幹＋接続

hī kām karte haiṃ.
小詞 仕事 する—未完了 コ—現在

「賢い人間は機を視野に置いてしか事を行わない。」[MSK : p. 118]

(7)では，日本語の副助詞「も」に当たる小詞 'bhī' が使用されている。日本語のテ形に「も」を付加した場合と同様，逆接の意味を表すものとしてしばしば使用される。(8)は小詞 'hī'「こそ」を使い，「～してこそ…する」すなわち日本語の反語「～しか…ない」に当たる強調を表す。ちなみに，この(8)における 'rakh karke[12] hī'「置いてこそ」の部分は，本来標準語（特に文語）では，(3)や(7)と同じく 'rakhkar hī' となるべきところなのだが，昨今この形式が主に口語体としてよく使用される。

(2) 不定詞斜格形

次に，ヒンディー語の不定詞斜格形を単独で用いる例を見てみよう。

(9) maiṃ pitā jī se milne jāūṁgā.
私 父 尊称 に 会う—不定・斜 行く—未来

「僕は父に会いに行くつもりだ。」[TY, p. 128]

(10) mujhe ek ādmī mārne ā rahā hai
私を 1 人間 叩く—不定・斜 来る—幹 続く—完了 コ—現在

「僕を叩きに，誰かがやって来るよ。」[Ch-9 : p. 33]

(9)と(10)は，目的を表すもので，移動を表す自動詞と共起する例である。日本語では「～しに」+「行く／来る」に相当する。この目的を表す「～しに」に意味的に近いものとして，「～するために」がしばしば挙げられるが，この二つは，形式自体は全く違う。前者は連用形「し[13]」に格助詞「に」を付けたもので，後者は形式名詞「ため」を用いた副詞節であり，これは述語に共起制約はなく任意の動詞述語に用いることができる。ヒンディー語では形式名詞のところで扱う '… ke lie' と同じである。

ところで，(9)の「～しに」+「行く」の「行く」が過去進行形（語幹＋'rahā'＋コピュラ動詞）になる場合，「しに」+「行くところだった」という意味にはならない。

(11) rām kuch kahne (hī) jā rahā thā.
ラーム 何か 言う—不定・斜 小詞 行く—幹 続く—完了 コ—過去

「ラームは（ちょうど）何かを言おうとしていた。」

⑾の場合，「～しに行こうとしていた」とはならず，「～しようとしていた」となる。つまり，これは不定詞斜格形の部分が独立したものになっておらず，主要語の述語との結びつきが強くなっているためと推察される。なお，カッコ書きの‘hī’は日本語の「ちょうど」や「まさに」に当たる小詞であり，オプションである[14]。

⑶ 不定詞斜格形＋後置詞

では，次に不定詞の斜格形に後置詞が付いたものを見てみよう。日本語の格助詞に当たるヒンディー語の後置詞には，主として位置格の‘meṃ’と‘par’及び，具格または奪格に使用される‘se’，そして与格の‘ko’がある。それぞれ不定詞の斜格形に付けることができる。これらのうち副詞節形成に一役買うのは，位置格及び奪格の後置詞である。与格の後置詞[15]については，通常，主要語となる述語として使われるため純粋な副詞節とはいえないので，ここでは扱わない。

まず，使用頻度の高い位置格の‘par’を使用したものから見てみよう。

⑿ mere ane par rām calā gayā.
私の・斜 来る—不定・斜 上に ラーム 歩く—完了 行く—過去
「私が来ると，ラーマは去って行った。」[HV : p. 31]

位置格の‘par’はそもそも「（～の上）に」という場所との接触を表す後置詞である。不定詞斜格形にこの後置詞が付くと，事象Ａと事象Ｂが引き続いて起こることを示す。つまり，日本語のいわゆる接続助詞「と」を用いた「～すると」と同じ意味を表すことになる。また，これは条件を提示する際の「～すれば／したら」を表す意味でも用いられる。なお，ヒンディー語にはこのパターンがある一方で条件を表す定形節も存在し，このパターン同様，よく使用される。なお，例文の述語は動詞複合[16]になっている。

次にもう一つの位置格である‘meṃ’を使用した副詞節の例を見てみよう。

⒀ unheṃ prasann karne meṃ sab kuch bhūl jāyegā.
その方を 喜んだ する—不定・斜 に 何もかも 忘れる—幹 行く—未来
「その方を喜ばせるのに何もかも忘れる。」[MSK : p. 82]

⒁ ājkal lāh kā upyog cūṛiyāṁ banāne meṃ kiyā jātā hai.
昨今 ラック の 使用 腕輪 作る—不定・斜 に する—完了 行く—未完了 コ—現在
「昨今ではラックは腕輪を作るのに使われる。」[MSK : p. 69]

⒀は「喜ばせるのに（従事して）」ということで，⒁は「作るのに」という意味になる。日本語ではこの場合，準体助詞「の」の助けを借りて動名詞的にする必要がある。

次は後置詞 'se' を用いた例である。

⒂ śīśe　cubhne　se　merā　sārā　jism　zaxmī　ho　gayā.
ガラス　刺さる―不定・斜　で　私の　全部の　体　痛んだ　なる―幹　行く―過去

「ガラスが刺さって，俺は体中痛くなった。」[Ch-9 : p. 30]

⒂は「刺さることによって」とういのがヒンディー語そのものの原義になるが，これが原因を表す。

最後に，小詞が付いたものを一つ挙げておこう。

⒃ drupad　kṣatriya　hone　par　bhī　bāṇvidyā　meṃ　baṛā
ドゥルパダ　クシャトリア　コ―不定・斜　上に　小詞　弓術　に　とても

kamzor　thā.
弱い　コ―過去

「ドゥルパダはクシャトリアなのに弓術に大変弱かった。」[MSK : p. 48]

これは，⒁で使用されていた後置詞 'par' に小詞 'bhī' が付いたものである。「～すると」が小詞なしの時の意味とすれば，この小詞が付くと「しても／（な）のに」という逆接の意味を表すものになる。

ところで，日本語で後置詞に相当する格助詞を用いた副詞節にはどのようなものがあるだろうか。

	する型	した型
に	～するに	
から	～するから	～したから
と	～すると	
まで	～するまで	

日本語には不定詞相当のものはないが，定形節に格助詞[17]が付くことができる。ヒンディー語では非定形を用いるところだが，日本語では「する／した」というテンスやアスペクト（事象の完了 vs. 未完了）を負った定形節になるのである。ここでは便宜的に「する型」と「した型」と呼ぶことにする。

最初に挙げた「に」の場合，する型は「察するに」，「見るに」に「至る／耐えない／違いない／過ぎない」等，主要語が述語になるもので慣用表現として多く残っているが，単独の副詞

節としても慣用的な「察するに」,「判断するに」のような表現に見られる。また,「した」型も「違いない／過ぎない」等に使われる。もう一つ，表には挙げていないが,「に」には否定辞を伴った「～せずに[18]」もある。これは生産的に使用されるものである。また，格助詞「の」を伴った「～する／した」+「のに」も，逆接を表すものとして多く使用されている。二番目の「から」は，する型，した型ともに原因もしくは理由を表す。その次の「と」は，する型，した型ともに「言う／聞く／思う」等に使われる格助詞で，動詞が主要語になるため純粋な副詞節の範疇にない。また，する型に限られた「～すると」については,「用言の終止形について，動作と動作とが引き続いて起こること，あるいは習慣的に起こることを表す」と『広辞苑』で述べられている[19]。最後の「まで」は，する型のみである。した型になると，副助詞的な働きになるのでここでは触れない。

なお，具格を表す「で」という格助詞もあるが，これは連体助詞「の」を付けた場合にのみ「～するので／したので」という具合に，原因，理由を述べるものになる。意味としては二番目の「から」とほぼ同じとされる。

(4) 不定詞斜格形＋属格後置詞＋形式名詞＋（ゼロ）後置詞

不定詞の最後に形式名詞を使用した副詞節を観察する。ヒンディー語も日本語も形式名詞を使用した副詞節は存在するが，ヒンディー語では不定詞を動名詞的に使用するので，この場合形式名詞との間に日本語の「の」に当たる属格後置詞を挿入しなければならない。この時の属格後置詞も ‘ke’ もしくは ‘kī’ という具合に不定詞と同様に斜格形[20]となる。ヒンディー語の代表的な形式名詞を以下に挙げる。

	後置詞型	ゼロ後置詞型
時間（前後）		… ke samay, ke vaqt
		… se pahle[21], … ke bād
場所		… ke/kī bajāy, … kī jagah[22]
原因	… kī vajah se	… ke kāraṇ
様態		（… kī tarah, ke jaise）
目的		… ke lie

表のカッコ内の形式は，不定詞斜格形の代わりに名詞が代入されるものである。ヒンディー語では形式名詞を使った副詞節は，不定詞，名詞を取るに拘らず多い。また，形式名詞によっては，たとえば場所や原因のように，同じ意味の語彙でも，ものによって後置詞があったりなかったりする。この辺りは慣用化した言い方として定着してしまっているためと考えられる。また，上の表からだけでも分かるが，ヒンディー語はゼロ後置詞型が多い。

一方の日本語も形式名詞を使うという点ではヒンディー語と同じであるが，日本語と大きく

異なる点は，後置詞の有無以前に，前節の不定詞斜格形＋後置詞の時と同様，「する／した」という，テンス・アスペクトを担った定形節が使用されることである。以下に上掲のヒンディー語に使用されている形式名詞に相当すると思われる日本語を列挙する。

	する型	した型
時間（前後）	～する時（に）	～した時（に）
	～する前（に）	
		～した後（に／で）
場所		～したところ
	～しているところに	
		～したところで
原因	～するため（に）	～したため（に）
	～するせいで	～したせいで
様態	～するように	～したように
目的	～するため（に）	
	～するよう（に）	

日本語の時間に関わる「時，前，後」については，格助詞の「に」もしくは「で」を付けたり付けなかったりできる。また，原因や目的に使用される「ため」という形式名詞も，ゼロ後置詞または格助詞を付加できる。ヒンディー語の後置詞の有無については，慣用化という次元のものであってこのような違いを生じない。「時」という形式名詞 ‘samay’ や ‘vaqt’ も例外ではなく，後置詞が付加されることはない。

場所を表すものについては，ヒンディー語は ‘bajāy’[23] が日本語の「～するところで」に当たる。通常日本語の訳語は「～する代わりに」もしくは「～するのでなく」となっており，行為に対する否定的な意味合いを含むが，これは「(本来) ～するところで」が転じた結果と考えられる。もう一つの ‘jagah’ を使ったものは中立的であり，必ずしも否定的な意味を持っていない。一方，日本語は「ところ」という形式名詞があるが，これに「ゼロ後置詞／に／で」がそれぞれ付加されると，全く意味が異なるものになる。ゼロ後置詞の場合は「時」を使うのとほぼ同じ意味になるが，「に」が付く場合は，「～していると／していたら」という条件を表すものになり，「で」が付くと「もし～しても／たとえ～しても」という仮定条件の逆接を導く意味になる。このように，ヒンディー語の場所を表す形式名詞と比べて，日本語の場所を表す形式名詞は機能が広範囲に亘っている。

次の原因だが，ヒンディー語の ‘kāraṇ’ や ‘vajah’ では「ため」と「せい」の意味の差はない。また，「ため」は格助詞「に」を外すことが可能だが，「せい」は「で」を外せない。

様態を見てみると，ヒンディー語は全て名詞専用の形式名詞群である。たとえば日本語の「私が言うようにせよ。」という場合に，ヒンディー語はこの形式名詞は使用されない。その場

合は関係副詞（定形節）しか使えない。

最後の目的だが，先述したとおり日本語の代表的なものとして「ため」，そしてもう一つ「よう」という形式名詞がある。それに相当するヒンディー語の‘… ke lie’[24]も，名詞及び不定詞斜格形のどちらもが代入可能である。

一番大きな特徴としていえるのは，日本語では格助詞が付随するか否かによって形式名詞自体が屈折を起こすということがないということである。したがって，日本語では形式名詞の形そのものからその格を峻別することはできないが，ヒンディー語では後置詞が付随する時の名詞の屈折である斜格形が，主格，対格以外のもの，すなわち副詞節であるということを指し示すことになる。特に上記のヒンディー語の「前」に当たる‘pahle’は直格形が‘pahlā’で，これは通常形容詞として使用されるため，その斜格形‘pahle’は副詞（adverb）と認定されている[McGregor (1993): p. 616]。しかし，日本語同様‘pahle se’「前から」のように別の後置詞を付加できることからも，名詞として機能していることは明らかである。したがって，これは形容詞の‘pahlā’は「前の」と「前」という具合に形容詞と名詞の属性を併せ持った語であり，この場合は名詞，つまり形式名詞の斜格形と考えるのが妥当である。

ところで，これらの中で最もよく使われる「時」に話を戻すが，ヒンディー語の中で挙げた形式は確かに日本語の「～する時」という副詞節として使用されるが，実際は関係副詞（定形節）を使う方が多い。

(17) ek din safāī karte samay inhoṃne śiv ke dhanuṣ ko khiskā diyā.
1 日 掃除 する—未完了・斜 時 この方＋能格 シヴァ の 弓 を ずり動かす—幹 与える—過去

「ある日掃除をしている時，この方（シーター）はシヴァの弓をずり動かした。」

(17)は‘karte samay’は後述する未完了分詞が直接形式名詞を修飾しているが，通常は‘karne ke samay’という具合に，不定詞斜格＋属格後置詞斜格形のパターンを取る。これは先にも述べた通り，関係副詞（定形節）で以下の通り言い換えることができる。

(18) ek din jab sītā safāī kar rahī thīṃ, tab inhoṃne śiv ke dhanuṣ ko khiskā diyā.
1 日 関副 シーター 掃除 する—幹 続く—完了 コ—過去 その時 この方＋能格 シヴァ の 弓 を ずり動かす—幹 与える—過去

「ある日，シーターが掃除をしている時，シヴァの弓をずり動かした。」

このように，時間の場合はどちらものパターンも存在し比較的よく使われているが，どちら

かというと定形節の方が好まれる傾向にある。例示は割愛するが，原因や目的についても定形節での表現が可能であるし，様態に至っては，日本語の「よう」のように名詞でも定形節でも使用できるわけではない。文レベルのものを使う場合は，あくまで関係副詞（定形節）に依拠するのである。

4．分 詞 型

不定詞を見終えたところで，今度は分詞を使った副詞節に移る。前述の通り，副詞節には分詞も斜格形を使用する。また先のパラダイムでも確認した通り，分詞についてはヒンディー語の分詞と日本語の分詞１には平行性があるので，ここではヒンディー語の未完了分詞 vs. 日本語の連用形，及びヒンディー語の完了分詞 vs. 日本語のテ形をそれぞれ詳細に観察することにする。

(1) 未完了分詞型

a） ヒンディー語の未完了分詞

まずは代表的なヒンディー語の未完了分詞斜格形とコピュラ動詞の完了分詞斜格形を使った例を見てみよう。

(19) droṇācārya　ne　socte　hue　kahā.
ドローナ　能格　考える—未完了・斜　コ—完了・斜　言う—過去

「ドローナは考えながら言った。」[MSK : p. 59]

ヒンディー語のこのパターンは，形態の持つ論理からすれば「考える」という行為が未完了で，「その状態にある」という部分をコピュラ動詞の完了形 'hue' が表しているということになる。したがって，(5)，(6)で既に例示した日本語の「ながら」や「つつ」を付けた事象の同時性を表すものと意味的に等価値と考えてよい。

次はこの形式に小詞 'bhī' が付いたものを見てみよう。

(20) itnā　kām　karte　hue　bhī　zyādā　paise　nahīṃ
これだけ　仕事　する—未完了・斜　コ—完了　小詞　多くの　お金　否定

milte.
手に入る—未完了

「これだけ仕事をしていてもお金がたくさんもらえない。」

(21) rām　us　kā　rāz　jānte　hue　bhī　kisī　ko　kuch
ラーム　彼　の　秘密　知る—未完了・斜　コ—完了・斜　小詞　誰か　に　少し

nahīṃ kahā.
否定 言う—過去

「ラームは彼の秘密を知っていても，誰にも何も言わなかった。」

⑳は「していても」，㉑は「知っていても」となり，共に逆接を表している。ちなみに前掲(7)の接続分詞 '-kar' を使ったものは，「知っても」となっていた。本来「知る」という行為を表す動詞 'jānnā' だが，未完了分詞の 'jānte' を使うことにより「知っている」という状態を表す。したがって，日本語で言うなら「—て」+「いる」になると考えればよい。

このように事象の同時性を表すのに使用される未完了分詞斜格形＋コピュラ動詞斜格形だが，このコピュラ動詞を示さずとも日本語のテ形のように文をつなげることができる。以下の例を見てみよう。

㉒ ravi ke rahte tū kuch nahīṃ kar saktī.
ラヴィ の いる—未完了・斜 おまえ 何も 否定 する—幹 できる—未完了

「ラヴィがいて（は），お前は何もできないだろう。」[TY : p. 235]

㉓ choṭū ke uṛāte bhī vah pataṃg to uṛne
チビ助 の 飛ばす—未完了・斜 小詞 その 凧 小詞 飛ぶ—不定・斜

kā nām nahīṃ letī.
の 名 否定 取る—未完了

「チビ助が飛ばそうとしてもその凧は飛びもしない」[TY : p. 236]

㉒と㉓では，⒆，⑳，㉑のようにコピュラ動詞は使用されていないのだが，日本語のテ形と同じように単独で文をつなぐのに使用されている。なお，この二つの例も先の⒆，⑳，㉑のように未完了分詞斜格形の後にコピュラ動詞斜格形を入れることも可能である。[25)]

次の例は未完了分詞に強調の意味を表す小詞 'hī' が付いた例だが，このパターンは慣用表現と化している。

㉔ kuntī dekhte hī bolī….
クンティー 見る—未完了・斜 小詞 話す—過去

「クンティーは（それを）見るとすぐに，（こう）言った。」[MSK : p. 95]

㉔は，日本語の「～するとすぐ（に）」，「～するや否や」，「～した途端」のように，事象Ａが起きた直後に事象Ｂが起きるという意味を表す。

この他にも，未完了分詞を重ねるパターンもある。以下がその例である。

(25) … ve　calte-calte　thak　gaye　the.
彼ら　歩く—未完了・斜　疲れる—幹　行く—完了　コ—過去
「彼らは歩いているうちに，疲れてしまっていたのだ。」[MSK : p. 73]

(25)は，未完了分詞の事象が反復される，もしくはその反復が続く間のことを表す。これを日本語で逐語訳すれば，「歩いて，歩いて，疲れた。」となるが，当の日本語では同じ動詞のテ形をこのように重ねて使用することはない。「歩くという行為が反復されている間に」というのが原義だから，日本語は「～しているうちに」や「～している間（に）」がその訳語として妥当となる。もう一つ同じ未完了分詞を重ねる例を挙げておく。

(26) … vah　girte-girte　bacā.
彼　倒れる—未完了・斜　助かる—過去
「彼は危うく倒れそうになった。」[TY : p. 234]

文字通りは，「倒れそう，倒れそう，助かった。」である。主動詞に 'bacnā' を使うと，「倒れるという行為が完了する寸前に助かる」ということになる。ここで未完了分詞が使われるのは，行為自体が完了していないためであろう。このように主動詞に「助かる」を使うと，日本語の「危うく～しそうになる。」と意味的に同じになる。日本語で「倒れて」といえば，完了の意味になりここでは相応しくないので，形式名詞「そう」を使って「そうになる」という別の表現を使わざるを得ない。

b）　日本語の連用形

日本語の連用形は，元々ヒンディー語の未完了分詞に相当する。実際，日本語のこの連用形が使われている例を見てみよう。

(27) 太陽は東から昇り，西に沈む。
(28) 春になると，桜は美しい花を咲かせ，人々を楽しませる。

(27)や(28)は事象と事象を順次つなげるのに使用されている。ただし，このように連用形を使ったものは，多分に文語的である。

この他にも日本語には分詞の種類が存在する。2章で提示した分詞2の「—ば／れば」形は，条件を表すものである。ヒンディー語ではこの場合，条件節（定形節）を使用する。

ところで，この連用形を用いた副詞節ということで，日本語の特徴としてここで挙げたいのは，様々な動詞の連用形を使った副詞節の生成である。

	肯　定	否　定
連れる	～するに連れ	
従　う	～するに従い	
当たる	～するに当たり	
伴　う	～するに伴い	
拘　る		～するにも拘らず

代表的なものとして以上の通り挙げたが，この他にもたくさんある[26]。ヒンディー語では，動詞の非定形を副詞節として使うのは数限られている。先の(22)や(23)で挙げた通り，慣用的なものぐらいしかない。また，日本語のこれらは一組で慣用的に用いられるので，オプションとしての副助詞である「も」や「こそ」を単独で直接付けることはできない。通常，「連れ」，「従い」，「当たり」，「伴い」のように肯定形のものが多く見られるが，中には否定辞を伴った「拘らず」のようなものもある。

(2) 完了分詞型

a） ヒンディー語の完了分詞

ヒンディー語で完了分詞の斜格形を使うと，完了事象を表す副詞節になる。前節の未完了分詞斜格形とコピュラ動詞の完了分詞斜格形と同じ形式で，未完了分詞がそのまま完了分詞に代わった例を以下に挙げる。

(29) śrīmatī　śarmā　hāth　meṃ　ṭre　lie　hue　kamre
夫人　シャルマー　手　に　トレー　取る―完了・斜　コ―完了・斜　部屋

meṃ　praveś　kartī　haiṃ.
に　入ること　する―未完了　コ―現在

「シャルマー夫人が手にトレーを持って部屋に入って来る。」[HKS : p. 2]

この(29)の完了分詞 'lie' は日本語の同じテ形の「(手に) 取って／持って」を使うが，行為は未完了ではなく完了したものである。文脈によっては「～したまま」の形式名詞「まま」を使ったものを充てることもできる。しかしながら平叙文では，テ形の持つ完了性だけで十分であり，特に完了事象を強調するのでない限り「まま」を使うには及ばない。

(30) māṁ　apnā　sāmān　pakṛe　hue　khaṛī　thīṃ.
母　自分の　荷物　持つ―完了・斜　コ―完了・斜　立った状態の　コ―過去

「母は荷物を持ったまま，立っていた。」[TY : p. 233]

(30)も「荷物を持った状態で」という意味だが，使用されている動詞は「手でしっかり握る」という意味を持つ ‘pakaṛnā’ である。便宜的に「まま」を使ったが，これも文脈によりテ形で十分である。

(29)，(30)からも分かるように，事象の同時性，それも未完了分詞の時と少々異なり，事象は完了していることを前提とする完了分詞斜格形＋コピュラ動詞斜格形だが，先の未完了分詞の時と同様，このコピュラ動詞を示さないままで使用することも可能である。例を以下に挙げよう。

(31) hāth　meṃ　hāth　milāe,　nācte　hue,　ek
手　に　手　合わせる―完了・斜　踊る―未完了・斜　コ―完了・斜　1

cauthā　gīt　cheṛkar …
4番目の　歌　始める―幹＋接続

「手と手を合わせて，踊りながら，4つ目の歌を歌い始めて…。」[TY : p. 238]

この例ではこれまで扱ってきた形式が羅列されている。「手と手を合わせて」という行為は既に完了しているため，完了分詞が使用される。ここでコピュラ動詞が必要ないのは，その完了行為の持続を特に表す必要がないからと考えられる。もう一つ例を挙げておこう。

(32) tumheṃ　bhārat　āe　lagbhag　che　mahīne　ho　gae
君に　インド　来る―完了・斜　約　6　月　なる―幹　行く―完了

haiṃ
コ―現在

「あんたがインドに来て，だいたい6ヶ月になるわね。」[HKS : p. 29]

これは時間の経過を表す与格構文とされるものだが，「人が～して○○になる」の「～して」の部分で使われるのが，任意の動詞の完了分詞もしくは未完了分詞の斜格形である。ここでは完了分詞が使用されているが，例えば「日本に住んで」のような「住む」という事象が未完了であれば，当然未完了分詞の斜格形になる。また，(19)や(30)のように，未完了分詞もしくは完了分詞の後にコピュラ動詞斜格形が付くこともある。それはあくまで動詞が表す事象に重きがあるか，コピュラ動詞の表す完了した状態に重きがあるかに依るものと考えられる。

最後に完了分詞の斜格形を使用した慣用表現も挙げておこう。

(33) binā　soce　kuch　mat　karnā
なしに　考える―完了・斜　何も　否定　する―命令

「考えることなしに，何もするな。」[TY : p. 235]

(33)は，日本語の「～せずに／しないで」に当たるといわれる「'binā'[27]＋完了分詞斜格形」の例である。語順がしばしば「完了分詞斜格形＋'binā'」になることから，辞書では前置詞，後置詞の両方を品詞として併記している。なお，動詞ではなく名詞が来る場合は，属格後置詞の斜格形 'ke' を伴い，前置詞型の「'binā'＋名詞＋'ke'」か後置詞型の「名詞＋'ke binā'」になる。

b） 日本語のテ形

最後にヒンディー語の完了分詞に形式上相当する日本語のテ形について観察してみよう。先にも述べたが，連用形は，このテ形を使って以下の通り言い換えることが可能である。[28]

(34) 太陽は東から昇って，西に沈む。

(35) 春になると，桜は美しい花を咲かせて，人々を楽しませる。

(34)，(35)は(27)，(28)の例を連用形からテ形に換えたのものである。また，このテ形に格助詞「から」を付けたものも挙げておく。

(36) 御飯を食べてから，歯を磨く。

(36)のように定形節の「する／した」に格助詞「から」を付けると，第3章の(3)のところで見たように原因や理由を表すものになるが，このテ形に付くと，「事象Aから（が起因して）事象Bが起こる」という格助詞の原義による論理構造が働き，条件を表すものになる。したがって，ここでは事象Bの「歯を磨く」は事象A「御飯を食べる」の条件を満たした後に初めて行われるということになる。

最後にテ形に副助詞が付いた例を挙げておこう。

(37) 御飯を食べても，歯を磨かない。

(38) 努力してこそ，道は開ける。

これまでヒンディー語の方は何度か触れたが，(37)のテ形に副助詞「も」を付けたものが日本語の逆接を表す形式になる。同じく分詞1の連用形には，この副助詞「も」は付き得ない。(38)の副助詞「こそ」が付いたものは，「も」を付加する場合と違い，あくまでオプションである。

また，例は割愛するが，日本語には分詞1のテ形同様，終止形の「―た」形から派生したと考えられる分詞2の条件を表す「―たら」形，分詞3の事象の並列を表す「―たり」形が存在する。ヒンディー語では分詞2の場合，既に述べたとおり，法の範疇にある条件節を使用する。もう一つ，日本語には並列を表す分詞3の「―たり」形があるが，これに当たる特別な形式は

ヒンディー語には存在しない。

最後に，様々な動詞のテ形を使用した慣用的な副詞節を改めて以下に挙げておこう。

	肯　定	否　定
連れる	～するに連れて	
従　う	～するに従って	
当たる	～するに当たって	
伴　う	～するに伴って	
す　る		～しないで[29]

これらは連用形のところで挙げた例のテ形を使用したものである。先の連用形を文語的で形式張った言い方とするならば，このテ形を使ったものは，より口語的でかつ形式張らない言い方といえよう。また，最後に挙げた「する」については，肯定の「～して」の否定「～しないで」は，慣用化されたものとして広く使用されている。[30]

5．両言語の共通性と異質性

以上３，４章で観察した不定詞及び分詞の例を元に，ここではヒンディー語，日本語の主だった特徴をまとめ，両言語に共通な点，また異質な点について，意味や機能にも触れながら考察する。

まず，最初に扱った不定詞だが，原形不定詞についてはヒンディー語と日本語の両方にあるわけではない。日本語にはこれに相当するものがないのである。しかし，形式の平行性はないものの，順次起こる事象を接続するという意味の点を考えると，ヒンディー語の原形不定詞そのもの，また語幹に接続分詞 '-kar' が付いたものは，日本語の分詞１及びテ形と同じ機能を果たすと言える。特にヒンディー語も日本語も，これらの原形不定詞及び分詞１の用途が狭まっているという点もよく似ている。

次に扱った不定詞斜格形そのものは，日本語で目的を表す形式「～しに」と意味的に同じになる。また，ヒンディー語にしても日本語にしても，これらの形式が使用できるのは述語が移動の自動詞の場合に限られている。一方，一般的に目的を表すものには，形式名詞を使った副詞節を使う。

また，不定詞斜格形に後置詞が付くものとしては，ヒンディー語の後置詞 'par, meṃ, se' を使用したものを観察した。'par' はその後置詞の原義に基づき，事象が引き続いて起こる場合に使用されるが，日本語で言えば，いわゆる接続助詞「と」を用いた「～すると」，もしくは分詞２の「～すれば／～したら」に意味的に相当する。また 'meṃ' を用いたものは，「～するのに」の「のに」と同じように使われ，'se' は原因や理由を表すものになる。'se' については，

しばしば日本語のテ形がこの形式に意味的に近いものとして訳語に充てられる。一方の日本語の格助詞は「に，から，と，まで」が使用できるが，日本語の場合，テンス・アスペクトを担った定形節に付くことがヒンディー語と大きく異なる点である。

そして，不定詞の最後に形式名詞を使ったものを挙げた。すべてを列挙したわけではないが，ヒンディー語ではこの形式がかなり多く，また頻繁に使用される。本稿で扱ったのは，基本的な副詞節となる時間とその下位にある「前後」，そして場所，原因，様態，目的の形式名詞を用いたものだが，ヒンディー語ではこれらも不定詞斜格形を用いた形式になるが，日本語の場合は定形節を用いる。一方，ヒンディー語では，時間の「前後」については非定形のパターンしか持っておらず，定形節で表すことはできない。反面，非定形のパターン及び関係副詞（定形節）の両方で表すことができるものもある。それが，時間，原因，目的である。もう一つの場所については，ヒンディー語の 'bajāy, jagah' は，日本語で挙げた形式名詞「ところ」が形成する副詞節とは意味的に異なる。特にヒンディー語の 'bajāy' という形式名詞は，「本来～する（すべき）ところで，そうしなかった。」というニュアンスが付け加わるので，日本語の「ところ」というより「代わり」の意味が強いといってよい。残る様態については，ヒンディー語は「Nのように」という名詞（N）は代入できるが，文レベルであれば，時間と同様，関係副詞（定形節）を用いることになる。

このように全体を通してみると，日本語は，時間，場所，原因，様態，目的のうちすべて定形節と形式名詞を使用するが，ヒンディー語は関係副詞節や条件節等の定形節を使うパターンと形式名詞を使うパターンが入り乱れているのがはっきり分かる。

次にもう一つの動詞の非定形である分詞についてまとめる。分詞１と，対する過去時制「―た」形の非定形であるテ形は，ヒンディー語の未完了分詞と完了分詞に形式上対応している。述語の例ではあるが，日本語も方言レベルでは，「―して」+「おる」と同時に「―し」+「おる」の連用形と存在を表す動詞の組み合わせが現存しており，前者が完了事象を，後者が未完了事象を表す。現代標準日本語では「～して」+「いる」しかなくなってしまったが，これはつまり，元々形態が表していた未完了，完了というアスペクトを超越してしまったということである。しかし，ヒンディー語の方はそうではない。分詞の形態自体がそれぞれ未完了 vs. 完了のアスペクトを担っているのである。これは述語レベルだけではなく，副詞節を形成する場合にも当てはまる。第３章の(1)のａ)未完了分詞で挙げた例から分かるように，未完了分詞を使うと「事象が未完了の状態で」という形態の原義が働く。対する(2)のａ)完了分詞の例を見ると，「事象が完了の状態で」という原義が働いている。実際，未完了分詞もしくは完了分詞の斜格形単独でも副詞節として用いることが可能だが，通常コピュラ動詞の斜格形が付く方が多い。その理由としては，それにより副詞節であると明示的に宣言できるためと推察される。たとえば，ヒンディー語には動詞複合という文法範疇があるが，その場合，この分詞の直後にも定形動詞が来ることがある。その分詞はあくまで述語の一部として機能しているのだが，見た目

（しばしば音声的にも）分かりにくい。日本語にも同じ文法範疇があるが，例えば「タベテイク」と言えば，「食べてから行く」のように「食べて」と「行く」がそれぞれ独立した述語になっているのか，それとも「（どんどん）食べていく」のように後続の「イク」は具体的な元の意味を消失し事象の進行ニュアンスのみを伝えるものになっているのか曖昧になり易い。日本語の場合は，文脈に応じて前述の「ながら」を使用したり，テ形に「から」を付けたりすることで回避できるが，日本語と違い，このようなアスペクトもしくは事象の様子を表す，いわゆる接続助詞や形式名詞がないヒンディー語では，このコピュラ動詞を使い「そういう状態で」と宣言することで，副詞節への使用と述語形成への使用を区別しているものと考えられるのである。

また，日本語の連用形とテ形を拡張使用したものとして，「応じ／応じて」，「従い／従って」等の慣用表現となっている副詞節も列挙した。ヒンディー語にはこのタイプはほとんどない。その代替であるかのように，形式名詞（別品詞と両用のものも含む）を使う副詞節が発達している。[31)]

個々のまとめは以上のようだが，巨視的に全体を見渡すとどうであろうか。以下に，本稿で扱った順次起こる事象を接続する順接型のヒンディー語のパターンを，意味もしくは機能の面から日本語のそれと対応させてみよう。

	ヒンディー語	日本語
不定詞	原形不定詞	連用形
（語幹）	語幹＋接続分詞 ‘-kar’	テ形
不定詞＋後置詞	不定詞斜格形＋‘par’	「～すると」 「～すれば／したら」 テ形
未完了分詞	未完了分詞 未完了分詞＋コピュラ動詞 ‘hue’	テ形 ながら，つつ
完了分詞	完了分詞 完了分詞＋コピュラ動詞 ‘hue’	テ形 まま

先にも述べた通り，ヒンディー語の原形不定詞は，現在ほぼ単独で用いられることがないわけだが，日本語の連用形も多分に文語的で用途が限らるという点から，同列にまとめた。現代ヒンディー語では，「語幹＋接続分詞 ‘-kar’」が順次起こる事象を表すのに最も一般的な接続形式となっている。つまり，形式上は異なるが，意味上はこれが日本語のテ形に最も近いと言える。もう一つテ形を充てることができるものとして，不定詞と後置詞 ‘par’ があるが，これはそもそもテンスやアスペクトに関わりないものであり，後置詞本来の原義が影響し「事象Ａの上で事象Ｂが発生」という論理構造を内在する。そのため，従属節である副詞節と主文の間に文脈上の因果関係が成立しなければならないという別次元の問題が絡むので，テ形よりは，むしろ日本語の似た表現である「～すると」や分詞２を充てる方が自然になる。[32)]

また，アスペクトを保持したヒンディー語の分詞については，未完了事象，完了事象ともに

テ形で覆うことができるのは確かだが，はっきり「未完了 vs. 完了」のアスペクトを強調したい場合には，語幹接続の接続助詞「ながら，つつ vs. まま」を利用する。また，テ形と「ながら，つつ」の対応関係と同じく，コピュラ動詞 'hue' は，事象が未完了もしくは完了の状態にあることを指し示すものになるのである。

一方，事象が相反するものを接続する逆接型としては，「語幹＋接続分詞 '-kar'」，「不定詞斜格形＋'par'」，そして「未完了分詞＋コピュラ動詞 'hue'」の直後にそれぞれ小詞 'bhī' が付く(7)，(16)，(20)，(21)，(23)が観察された。日本語も副助詞「も」を以って逆接を表せるのは同じだが，上掲の表中で付加可能なのは，テ形及びそれに関連する「ながら」，「つつ」のみである。「～すると」にも「も」を付加できるが，意味は逆接でなく仮定条件に限られてしまう。他にも日本語には逆接を表すのに，本来格助詞であり接続助詞と分類される「が」[33]を定形節に付けたり，「ところ」という形式名詞にその「が」を付けた「ところが」を使用したりできる。逆接を表す非定形の副詞節については，日本語の方がバリエーションは豊富であるといえよう。

また，箇所箇所で小詞 'bhī' とともに強調の小詞 'hī' を用いた例も挙げたが，ヒンディー語では(7)や(24)のように慣用表現と化したものが見られた。日本語には 'hī' に一番近い副助詞として「こそ」があるが，これは任意の語，句，節に付加され，談話文法的な機能を果たすものである。ヒンディー語の小詞 'hī' も本来はそうで，慣用表現として使われるのは，(8)の「～しか…ない」や(24)の「～するとすぐ」に当たるものぐらいであった。

6．終わりに

本稿では，ヒンディー語，日本語に見られる非定形の副詞節を取り上げ，その共通性と異質性を探った。両言語とも分詞を使用して非定形の副詞節を作ること，また，定形，非定形の違いこそあれ，形式名詞を使って副詞節を作ることが大きく共通していた。前者は，ヒンディー語の場合，未完了分詞及び完了分詞の形態が持つアスペクトを保持していたが，日本語の連用形とテ形は，形式上は一致しても，既にアスペクトを（少なくとも標準日本語では）失っていることが明らかになった。そして後者については，ヒンディー語は副詞節の種類により，形式名詞を使うパターンと関係副詞節や条件節という定形節のパターンも持っている。「前」と「後」のように完全に形式名詞のパターンに依存しているものがある一方で，「時」のように形式名詞のパターンと関係副詞（定形節）のパターンとが混在しているものもある。無論，混在していてもやはりインド・ヨーロッパ語族的な要素が強く影響しているせいか，定形節を好む傾向があるのも事実である。日本語にはそもそも関係副詞節がないため混用が起きるはずもなく，アスペクト的なものにも形式名詞を使うことが多い。一方（例示は割愛したが）ヒンディー語の形式名詞は，日本語の連用形もしくはテ形の慣用表現に対して使用されることが多いのである。

もう一つ大きな点として，本稿ではヒンディー語の未完了分詞，完了分詞に相当する日本語

の連用形とテ形の対応関係も明らかになった。ヒンディー語学では，意味対応の辞書から得た情報で直感的にテ形を充てたり，「ながら」を充てたりしがちだが，形式上の対応，ヒンディー語内の体系，そして日本語内の体系を概観し対照することなしでは，特に言語化しにくい部分は決して明らかにならない。その好例がヒンディー語学で単なるオプションのように説明され，処理されがちだったコピュラ動詞 'hue' である。本稿では，これは形態が示す「完了状態」の念押しであり，また別機能としては副詞節であることへの宣言という結論が導き出された。

略語：未来時制＝未来，現在時制＝現在，過去時制＝過去，命令法＝命令，未完了分詞＝未完了，完了分詞＝完了，不定詞＝不定，語幹＝幹，コピュラ動詞＝コ，斜格＝斜，接続分詞＝接続，関係副詞＝関副，否定辞＝否定（なお，直格の場合の名詞，形容詞，動詞の人称・数・性は省略）

翻字：①ṭ/ḍ/ṇ/ṛ/ṣ はそり舌音。②c は [tʃ]。③ṃ(＝ṅ/ñ/ṇ/n/m）は鼻音記号，m̐ は鼻母音記号。④子音＋h は有気子音 [C^h]。⑤ś は摩擦音 [ʃ]。⑥r̥ は母音。

注

1） ここでいう日本語は，現代日本語のことである。したがって，古文のいわゆる―かり活用などは考慮の対象としていない。

2） 従来の国語学や日本語学側から異論も多く出るだろうが，ここではヒンディー語のパラダイムとの並行性をもたせるため，敢えて「―う／よう」接辞を伴ったものを未来時制として設定した。

3） 語幹と同形のこれは，命令法内に挙げられている形の中で，もっとも強い命令を表すものである。

4） これはいわゆる仮定形の「―ば」形に接続する語幹である。見た目は定形の命令形と同じ形になる。

5） 不規則変化といわれる「する」，「来る」は五段活用と一段活用の中間型である。

6） これは語幹の場合と違い，原形不定詞の連接（juncture）が入る。もっとも，この形は現代ヒンディー語では文語にしかみられず，口語レベルで用いられることはほぼないと言ってよい。同様のことが，日本語の語幹（未然形，連用形，連体形，仮定形，意向形）のいわゆる連用形（パラダイム中では「話し」）と分詞の未完了形（同じく「話し」）についてもいえる。

7） 実際，現在でも方言レベルでは「話し・おる」vs.「話して・おる」に未完了事象 vs. 完了事象という相レベルの意味の違いが出ること見れば，明らかである。

8） 語幹の「はなし」と見た目が同じだが，語幹の方は続く接続形式との間に連接（juncture）が入らないものであり，一方のこれは連接が入るものである。

9） 分詞 3 は分詞 2 からの派生と考えられる。

10） 略号のないものは，大阪外国語大学大学院生 Ranjana Narsimhan にインフォーマントになっていただき，確認したものである。

11） 中期ヒンディー語の一つであるブラジ・バーシャー（Vraj Bhāṣā）では，独立分詞の機能として語幹と同形のものが使用されていた。また，この '-kar' の前身である '-kai/ke' を語幹に加えたものも同時に存在していた。[Snell (1992): p. 15]

12） この 'karke' は，通常 'karnā'「する」の語幹 'kar' に接続分詞 '-kar' が付き，接続分詞の側の '-

kar' が '-ke' に音韻変化を起こしたもの。したがって元々は日本語の「して」に相当する。

13） 鈴木（1972）は，この「し」をなかどめの形，つまり連用形中止法としている。動作名詞の代替として用いられる動詞の形であり格助詞を直接付けられることを考えると，この日本語の連用形は，あるいは不定詞の名詞用法に相当するものなのかもしれない。

14） 実際，文文法的にはオプションであるが，談話文法的には後続の文が突然性及び意外性を帯びたものであれば，この 'hī' が必要になる。日本語の「ちょうど（まさに）出かけようとしたところへ電話が鳴った。」の場合と同じである。「ちょうど（まさに）」を外すと，単なる叙述文になるのと同じである。

15） また，次節の形式名詞のところで扱う '… ke lie'「～するために」と置き換えて使用されることもある。

16） この他にも本稿の例文中にはたくさん動詞複合が使用されている。詳細は西岡（2004）を参照。

17） 通常国語学では，この格助詞は接続助詞とされるが，元々格助詞からの流用で成立した拡張機能なので，本稿ではヒンディー語の後置詞と合わせてそのまま格助詞と同等に扱う。

18） 現代では古語の否定辞「ず」を用いた「～せずに」の形式が，「～しないで」（後述）と共存している。さらに古い形になると「～せずして」という具合に，格助詞「に」の代わりに「して」という動詞を使っていた。現代でも古めかしい言い方をする時には使用される。

19） また同辞書ではこちらの「と」を接続助詞としている。文をつなぐものとしての「と」を特にそう呼んでいるようだが，あくまで格助詞の延長上にある拡張機能と推察される。

20） 属格後置詞の直後の形式名詞が男性の場合が 'ke'，女性の場合が 'kī'（直格も同形）となる。

21） この 'pahle'「前」の時のみ，属格後置詞 'ke' よりも 'se' を使うのが普通である。

22） 後置詞型で同じく「ところ」という意味の 'sthān' を使った '… ke sthān par' があり，これも「～の代わりに」という訳語を充てられるが，これは「～する代わりに」という動詞の非定形による副詞節は形成せず，専ら名詞専用である。もっともこの形式名詞はサンスクリット出自の語であるためか，日常語レベルの使用頻度も低いようである。

23） ペルシャ語から入ったこの 'bajāy' だが，本来は前置詞 'ba' に名詞「ところ」の 'jāy' が付いたもの。したがって，ゼロ後置詞に分類するには些か抵抗があるが，あくまでヒンディー語内ではゼロ後置詞なので，その枠組みに置いた。

24） この 'lie' は形式名詞と分類したが，形態から察するに，元々動詞 'lenā' の完了分詞 'liyā' が斜格形 'liye'（→ 'lie'）になったものが流用されたものと考えられる。日本語の「～にとって」によく似ており，実際，日本語の「～にとって」の意味にもよく使用される。

25） この場合，コピュラ動詞斜格形の 'hue' を入れると，強調になるというインフォーマントの話である。㉒のコピュラ動詞なしの例が中立文的な「ラヴィがいて何もできないだろう。」だとすると，ここのコピュラ動詞付きの方は，「ラヴィがいたんじゃ何もできないだろう。」のような，「のでは」（「のだ」の接続形＋「は」）を使用したような強調になるものと推察される。

26） また，単独の副詞になるものとして動詞出自の「繰り返し，取り急ぎ」や否定辞を伴った「思わず，残らず」等［鈴木（1972）：p. 472］，副詞に動詞を使用することが多い。

27） ペルシャ語出自の 'bagair' も 'binā' と同じ語順である。

28） テ形を使うと「です／ます」調の方が幾分相応しい感がある。言い換えれば，文語的な連用形の中止法と相対して，「―て」形は口語的と言える。つまりこれは未完了，完了という，形態の示すアスペクトの次元は越えており，純粋に文語的か口語的かという問題になっていると考えられる。また，事象の連続を表す副詞節が２つを越えると，連用形とこのテ形を混ぜて使用する。その場合

は，アスペクトでも文語口語の問題でもなく，多分に文レベルの日本語としての韻律的な問題が関与しているのではないだろうか。

29） ここの「—で」は「—て」形の異形。否定辞「ない」を伴う場合に「で」となる。この「～しないで」と同じものとして，「—て」形を用いた「—しなくて」という言い方もある。

30） ちなみに，中止法でも述べた単独の副詞について，この「—て」形を用いた単独の副詞もたくさんある。

31） ほんの一例であるが，「～に従って」という意味で，'… ke anusār' と '… ke mutābiq' の二つが通常使用される。

32） ちなみに，『広辞苑』は，「～すると」に関し，特に「習慣的に起こることを表す」と同時に「仮定条件の提示にも用いられる」としているが，ヒンディー語のこれと似た論理構造が働いて，文と文の間に因果関係が発生したものになっているためと推察される。

33） 元々前後の句を接続し共存的事実を示すものであり，さらに元をただせば主格の格助詞であったということである（『広辞苑第四版』）。

引 用 文 献

古賀勝郎『基礎ヒンディー語』大学書林，1986。

ナラシマン，ランジャナー＆アヌシュリー編　高橋明監修『ヒンディー語会話集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2005。

Prāṇ *Cācā Caudharī vol. 9.* Ḍāyamaṃḍ Kāmiks, Naī Dillī, n. d..

Śukl, Umeś Candra *Hindī vyākaraṇ.* Vāṇī Prakāśaṇ, Naī Dillī, 2003.

Snell, Rupert & Weigtman, Simon *Teach Yourself Hindi.* Teach Yourself, 2003.

Vyathithr̥day, Śrī *Mahābhārat kī śreṣṭh kahāniyāṁ.* Sunil Sāhity Sadan, Dillī, 1998.

参 考 文 献

Cook, Walter Anthony *Introduction to Tagmemic Analysis.* Holt, Rinehart and Winston, New York, 1969.

Dahl, Östen *Tense and Aspect Systems.* Basil Blackwell, UK, 1985.

Dik, Simon C. *Functional Grammar.* North-Holland Publishing Company, Amsterdam, 1978.

Guru, Kamtāprasād *Hiṃdī vyākaraṇ.* Nāgarīpracāriṇī Sabhā, Vārāṇasī, 2035 (c1978).

Hopper, Paul J. & Traugott, E. C *Grammaticalization.* Cambridge University Press, Cambridge, 1993.

近藤達夫『外国語としての日本語』神戸市外国語大学，1975。

McGregor, R. S. (ed.) *The Oxford Hindi-English Dictionary.* Oxford, 1993.

三上章『シンタクスの試み』くろしお出版，1972。

西岡美樹「ヒンディー語のいわゆる複合動詞について」『EX ORIENTE vol. 10』大阪外国語大学言語社会学会，2004。

新村出編『広辞苑第四版 CD-ROM 版』岩波書店，1993。

Snell, Rupert *The Hindi Classical Tradition: Braj Bhāṣā Reader.* Heritage, New Delhi, 1992.

Srivastava, Ravindranatha *Hindi prayoga.* Sarada Bhasina, India, 1960.

鈴木重幸『日本語文法・形態論』むぎ書房，1972。

時枝誠記『日本文法口語篇』岩波書店，1950。
Varmā, Dhīrendra *Hindī bhāṣā kā ithās.* Hiṃdustānī Ekeḍemī, Prayāg, 1933.
—— *Vrajbhāṣā vyākaraṇ.* Hiṃdustānī Ekeḍemī, Prayāg, 1954.
吉川武時『日本語文法入門』アルク，1989。

On Non-finite Adverbial Clauses in Hindi as Contrasted to those in Japanese

Miki NISHIOKA

Abstract

The aim of this paper is to research non-finite adverbial clauses in Hindi, contrasted to those in Japanese. Hindi has 3 forms of non-finite verbs, i. e., Infinitive (Bare Infinitive included), Imperfective Participle and Perfective Participle. Japanese has Infinitive equivalents (i. e., stems), however, has *Ren-you* form and '*-te*' form corresponding to Imperfective and Perfective Participles, respectively. And both accompany Noun Equivalents when used as an adverbial clause.

This paper will clarify common points and different points between Hindi and Japanese and how those forms are matched to those in Japanese with respect to forms and usages between the 2 languages.

The table of contents is given below:

1. Introduction
2. Recognition of non-finite verb forms
3. Infinitives
   (1) Bare Infinitive
   (2) Oblique Infinitive
   (3) Oblique Infinitive＋Postposition
   (4) Oblique Infinitive＋Genitive Postposition＋Noun Equivalent＋(zero) Postposition
4. Participles
   (1) Imperfective Participle
      a) Hindi Imperfective Participle
      b) Japanese *Ren-you* form
   (2) Perfective Participle
      a) Hindi Perfective Participle
      b) Japanese '*-te*' form
5. Common points and different points between the 2 languages

6. Conclusion

Keywords: Adverbial Clause, Non-finite Verb, Infinitive, Imperfective Participle, Perfective Participle, Noun Equivalent